

## 豪州アデレード大学との奇縁



南オーストラリアの州都アデレードは、佳い街である。アデレード大学は、豪州最古の総合大学である。同歯学部解剖学資料室は、原住民アボリジニの資料の宝庫である。代々の教授たちが、20年にわたって約400人の口腔内の追跡調査をした。1997年2月、背丈もある木製ケースの広い引出しをあけたとき、思わず私は身震いしていた。

この解剖学講座のグラント・C. タウンゼント教授（現歯学部長）のもとに、新潟の影山幾男助教授（当時）が留学していた。私たち研究グループは、2回あわせて2週間余り、資料室へ通ってすべての顎模型を隈なく計測した。

42℃の酷暑にあえぎあえぎ、幾度もクリスマスツリーの飾られたホテルに逃避した。長年、アボリジニの住む灼熱の原野に赴いた先人研究者に敬服し、その努力と忍耐に深く感謝した。

じつは、私は資料収集にあわせて、同歯学部との姉妹校の提携を目論んでいた。しかし、日本人研究者のグラント詣では盛んで、本学はもっとも後発であった。当方の遠まわしの打診に、グラントは困ったように返事を避けた。諦めかけていたところ、私は、彼に構内のP.R.ベッグ記念室に案内された。

若い矯正科医は知らないが、ベッグはアボリジニの咬合様式からベッグ矯正治療法を創始し、一時代を画した大学者である。本学矯正学の榎 恵教授が、ベッグ直伝のテクニックをわが国に導入し、当時、先陣をきった矯正学講座は興奮に沸いた。ベッグはアデレードの名士の一人として、市内のマンホールの蓋に顕彰されていた。私たちは地図を片手に、そのマンホールを探しまわってカメラにおさめた。

ベッグは開業歯科医だったが、歯学部では彼の功績を高く評価した。記念室は、矯正診療室前のガラス張りの細長い室であった。壁一面に飾られた大小の表彰状や感謝状の額を眺めながら、私はフッと或る予感をおぼえた。

一枚の額に、見覚えのある癖字…Minoru Nakaharaというサインが目に入った。タイプで粗末な洋箋に打った名誉博士の学位記。中原 實 学長が、1969年にベッグに贈った名誉博士の第一号であった。思いがけない奇縁に万感込みあげ、私は「コレ、私の父ですよ」と指さした。グラントは青い目を見張って、30年前の友情の証に釘付けになった。

それから5ヵ月後、私は再豪し7月4日に姉妹校の調印をした。（写真：調印後、大学本館前）